

口永良部島の火山活動解説資料

福岡管区气象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方气象台

＜噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引上げ＞
口永良部島では、古岳火口付近で火山性地震が増加しており、山体の浅いところで地震活動が活発化しています。

火山活動が高まった状態となっており、新岳火口及び古岳火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があることから、昨日（16日）23時25分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引き上げました。

【防災上の警戒事項等】

新岳火口及び古岳火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、西側は新岳火口から概ね2kmの範囲では、火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

○ 活動概況

口永良部島では、古岳火口付近で火山性地震が増加しており、山体の浅いところで地震活動が活発化しています。新岳火口付近においても時折、火山性地震が発生しています。火山性地震は4月7日から昨日（16日）までの10日間に100回発生しています。

火山活動が高まった状態となっていることから、新岳火口及び古岳火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があります。新岳火口及び古岳火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、西側は新岳火口から概ね2kmの範囲では、火砕流に警戒してください。

11日に山麓及び海上から実施した現地調査では、新岳及び古岳付近の地熱域の状況に特段の変化は認められませんでした。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php
資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

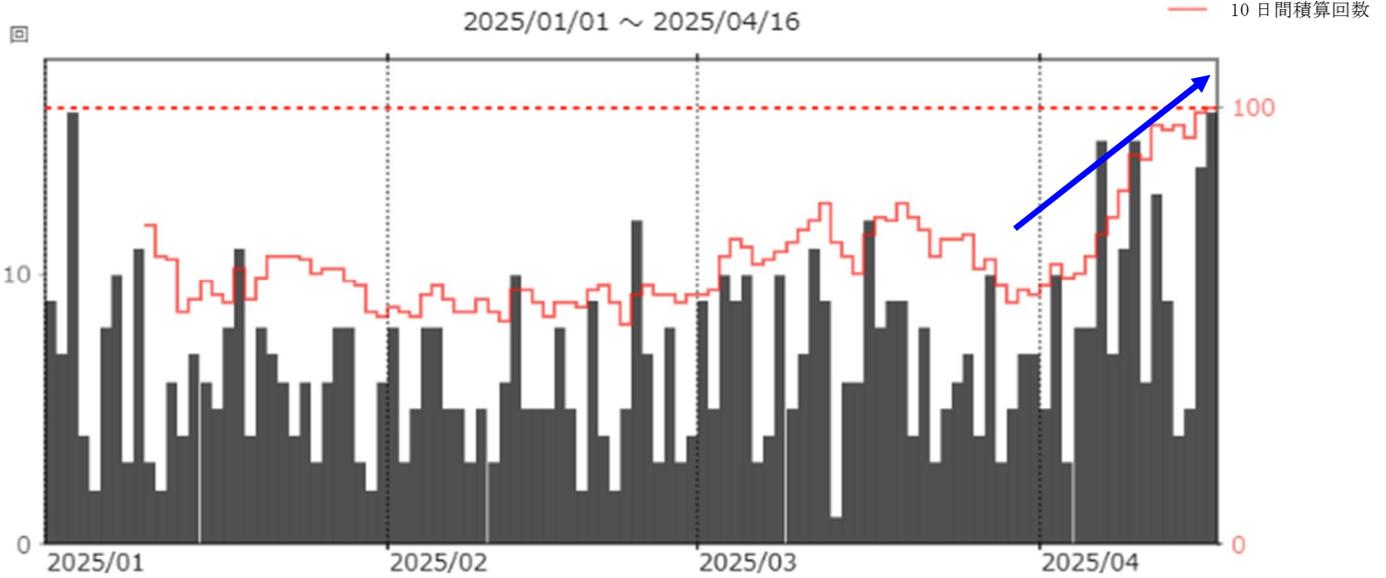
この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

噴火警戒レベルの判定基準表については気象庁ホームページを御覧ください。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/filing/level_kijunn/keikailevelkijunn.html

① 口永良部島 火山性地震の日別回数及び10日間積算回数



② 口永良部島 火山性地震の最大振幅 (FDKL (京) 観測点上下動成分)

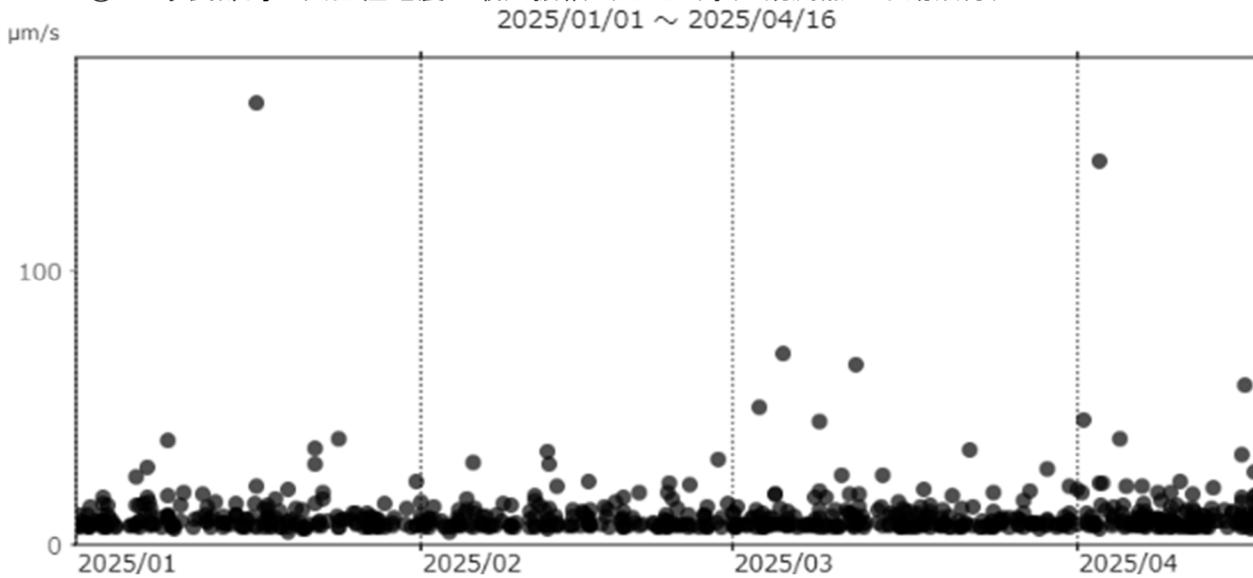


図2 口永良部島 火山性地震発生状況 (2025年1月1日～4月16日までの速報値)

- ・ 古岳火口付近で火山性地震が増加しており、山体の浅いところで地震活動が活発化しています。新岳火口付近においても時折、火山性地震が発生しています。4月7日から昨日(16日)の10日間に100回発生しています。
- ・ 振幅の大きな火山性地震は発生していません。



図3-1 口永良部島 観測位置及び撮影方向

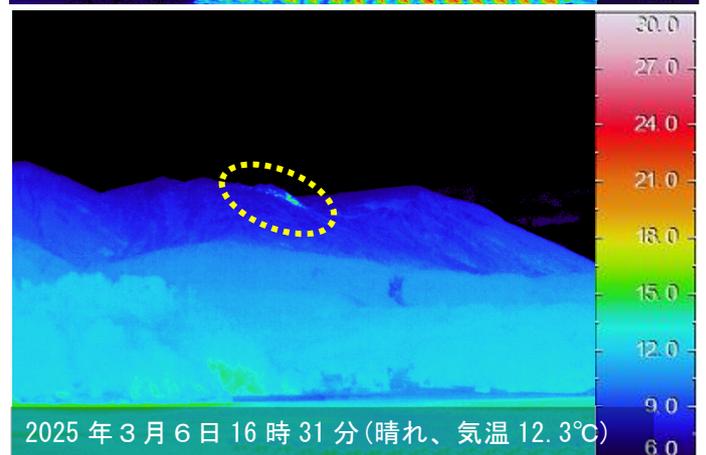
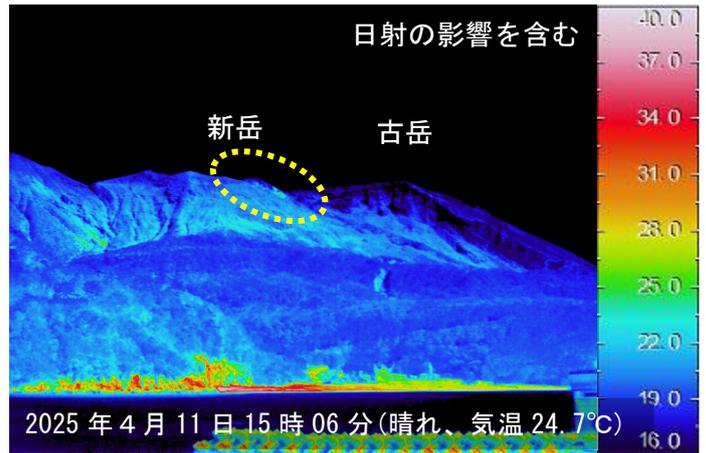


図3-2 口永良部島 新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の状況（本村から観測）

- ・11日に実施した現地調査では、赤外熱映像装置による観測において新岳火口西側割れ目付近で引き続き地熱域（黄色破線内）を確認しました。地熱域の状況に特段の変化は認められませんでした。
- ・古岳の確認できる西側の範囲では特段の変化は認められませんでした。

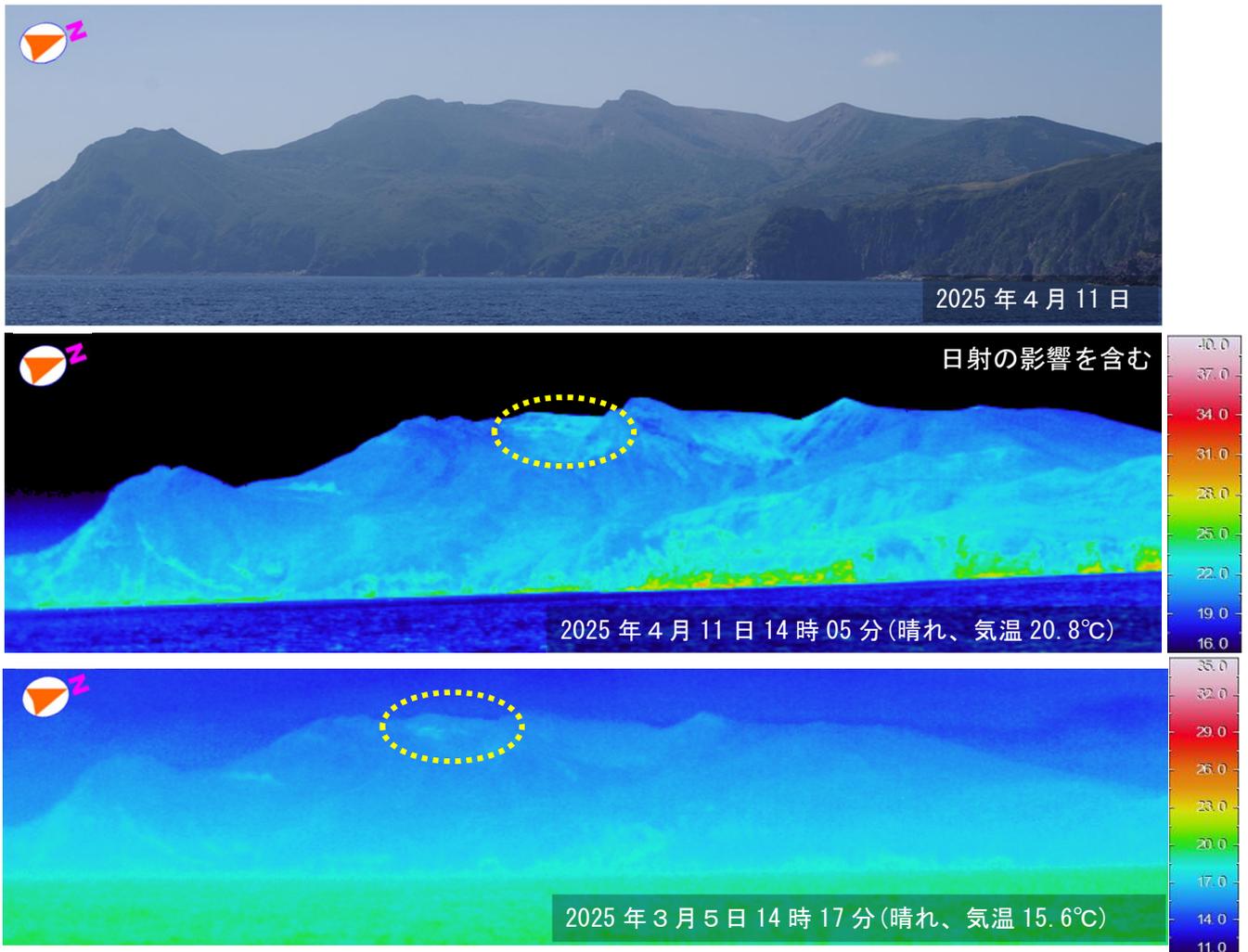


図 3-3 口永良部島 古岳火口付近の状況（島の南東側海上から観測）

- ・ 11日に実施した現地調査では、赤外熱映像装置による観測において古岳火口周辺の地熱域（黄色破線内）の状況に特段の変化は認められませんでした。
- ・ 古岳では、火口縁を越える噴煙は確認されませんでした。

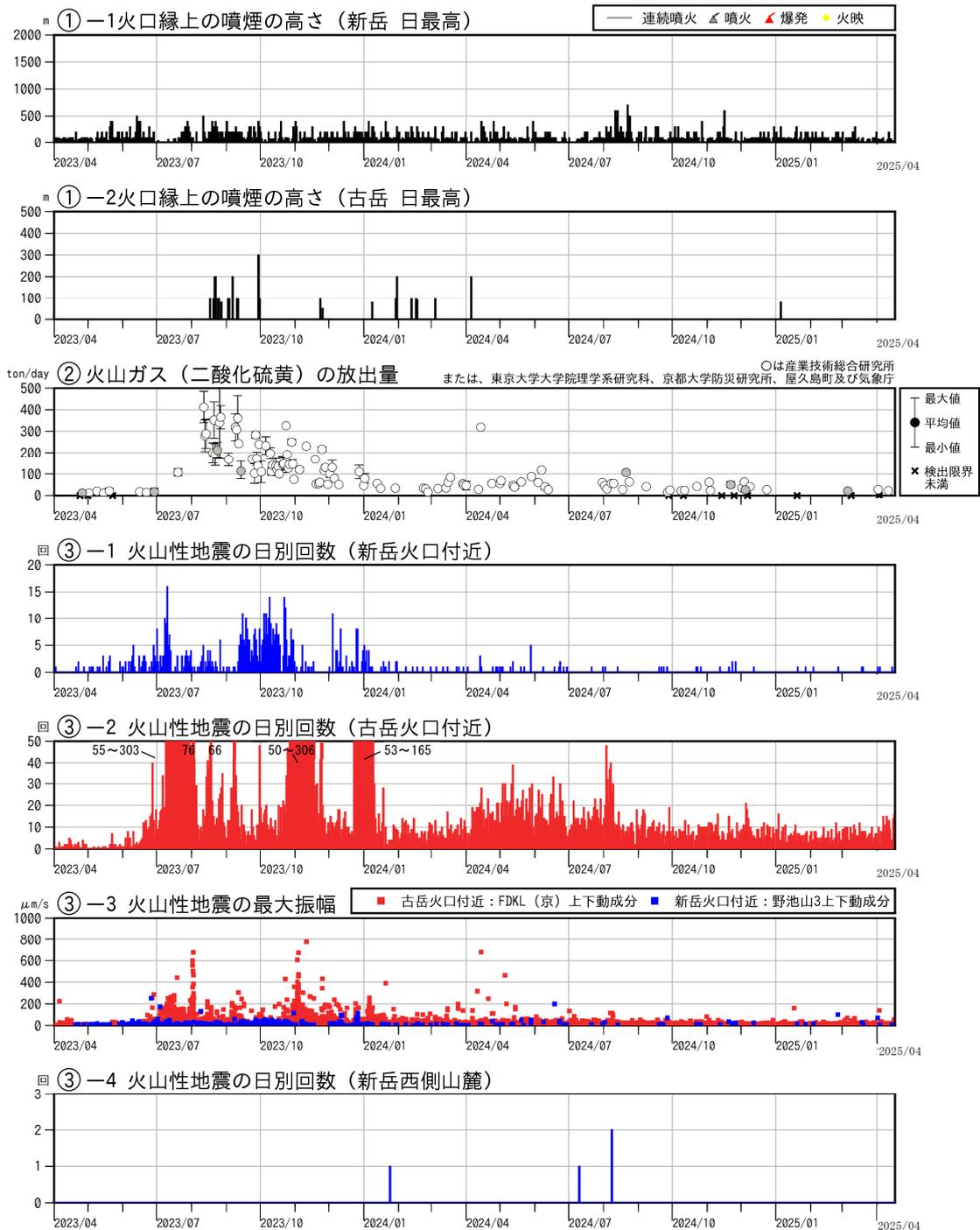


図4 口永良部島 最近の火山活動経過図（2023年4月～2025年4月16日までの速報値）

< 4月以降の概況 >

- ・噴煙の状況に変化はなく、白色の噴煙が新岳火口では最高で火口縁上 200mまで上がりました。古岳では、監視カメラで火口縁を越える噴煙は確認されませんでした。11日に実施した調査においても噴煙は確認されませんでした。
- ・東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、2024年8月以降は1日あたり概ね100トンを下回っており、検出限界を下回る日も時々みられるなど少ない状態となっています。4月11日の観測では1日あたり20トンでした。
- ・古岳火口付近で火山性地震が増加しており、山体の浅いところで地震活動が活発化しています。新岳火口付近においても時折、火山性地震が発生しています。4月7日から昨日（16日）までの10日間に100回発生しています。
- ・新岳西側山麓付近の火山性地震は観測されませんでした。

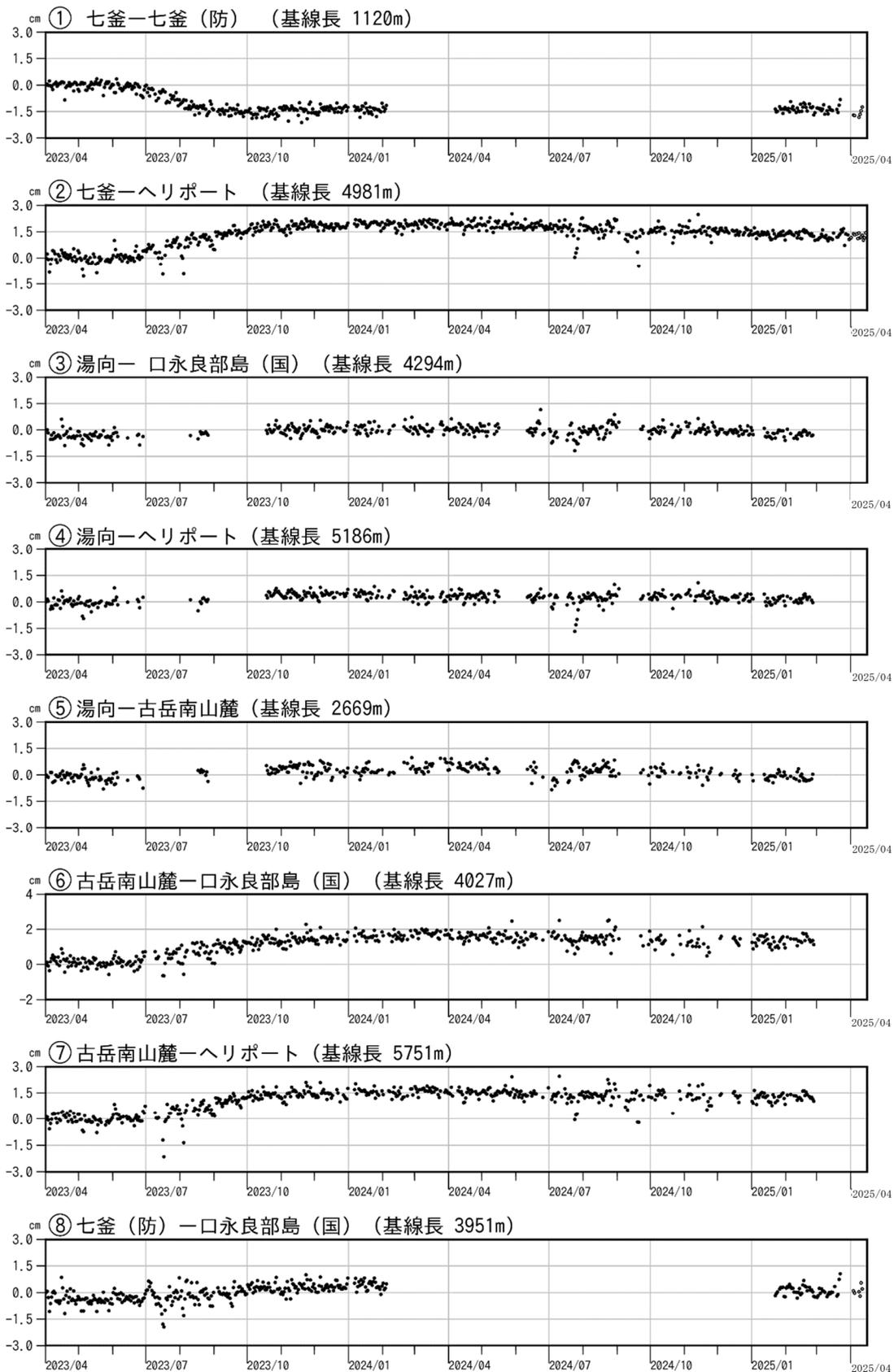


図5 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化 (2023年4月~2025年4月15日)

GNSS 連続観測では、2023年11月以降、山体の膨張を示す変動は認められません。

これらの基線は図6の①~⑧に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2023年3月23日の観測点修繕工事(七釜観測点)に伴うステップを補正しています。

(国): 国土地理院、(防): 防災科学技術研究所

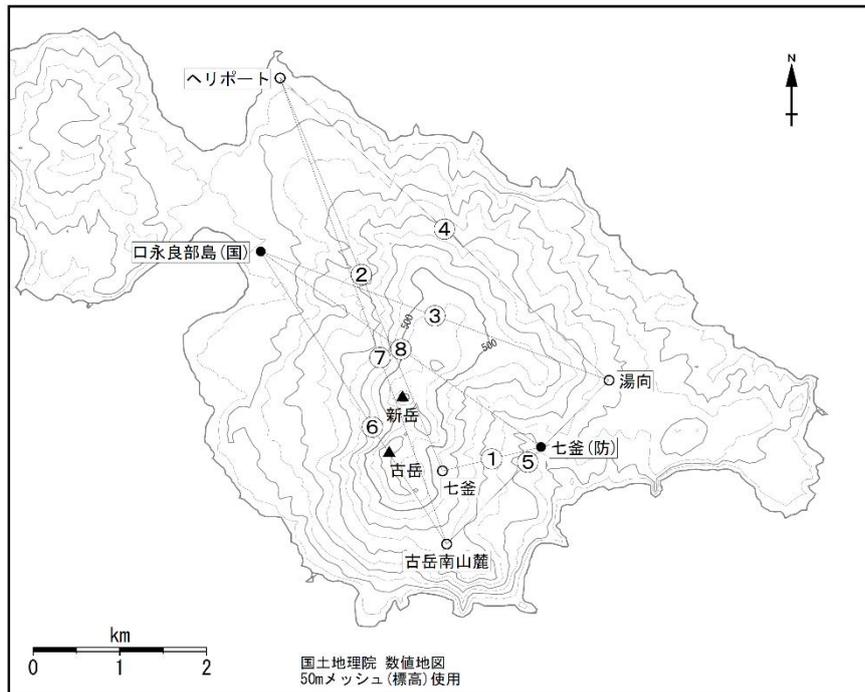


図6 口永良部島 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国) : 国土地理院、(防) : 防災科学技術研究所

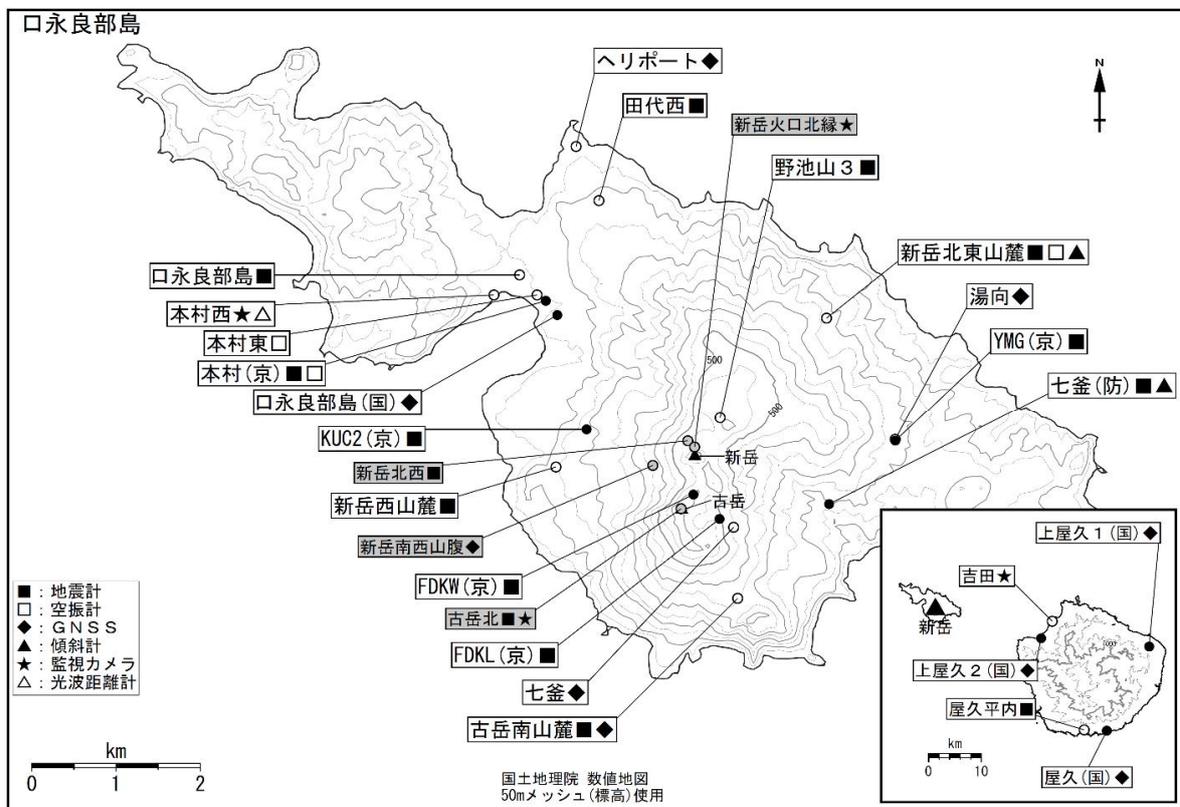


図7 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国) : 国土地理院、(京) : 京都大学、(防) : 防災科学技術研究所

図中の灰色の観測点名は、噴火等により長期障害となっている観測点を示しています。